

『ご挨拶』

✽✽

初夏の晴れた昼下がり、
着なれないスーツを身に纏う僕に、彼女が告げた。

「今日は、宜しくね」

彼女の表情から伝わる緊張感が伝染していることを肌で感じる。

「うん、頑張るよ」

声が震えている。

歪んだネクタイを整えてくれる彼女の目を見た。

瞬間、思った。

新婚生活ってこんな感じなのかなあ……と。

「じゃあ、行こうか」

と、彼女が言った。

聞こえるか聞こえないかくらいの声で、『うん』と肯いて彼女の左隣に歩み寄る。

歩いている間、無言の時間がつづいた。

唐突に、彼女が口を開いた。

「うちのお父さん、厳格な人なの」

「何度も聞いた」

「大丈夫？」

「大丈夫ではないけど……頑張るよ」

「……ありがとう」

僕は今、一生に一度あるかないかの経験に挑もうとしている。
これだけ言えば察してくれる人間は多いだろう。

「そこ曲がったらもうすぐ着くよ」

彼女の声も震えていた。

僕たちは、十字路を右へ曲がる。

歩いている最中弱気な自分が、『玄関の扉を開けたら拳銃を持ったお父さんが待ち構えていたらどうする?』と誘^{いざな}ってきた。

もうひとつ弱気な自分が、有り得ない答えを導きだそうとした時、彼女の声が現実世界に引き戻してくれた。

「ここ、私の家」

何の変哲もない一軒家が建っている。けれども、僕にはそれが決して足を踏み入れてはならない魔物の館にしか見えなかった。

「準備はいい?」

と、彼女が言った。

「準備は出来ていないけど……頑張るよ」

と、僕は答えた。

ガチャ……。

「ただいまあ。連れてきたよお」

家の奥から、『はい』という声が聞こえてきた。

玄関先まで足を運んでくれたお母さんが僕の目を見て、『いらっしやい』と伝えてくれた。

深くお辞儀をして、「初めまして」と伝えていた。

「さあさあ上がって下さいな」

と、来客用のスリッパを用意してくれたお母さんは家の奥へ姿を消した。

「お父さん、いらっしやいましたよ」

僕と彼女は目を見合わせる。

彼女の瞳は、泳いでいた。

平泳ぎだろうか？

バタフライだろうか？

それとも、背泳ぎだろうか？

なんて考える余裕はない。もう少しユーモアがあれば良かったのに、と無意識的に考えている僕の目には彼女の強張った表情が映っている。

生まれ育った自宅にいるのに緊張しなければならない状況って相当だよなあ、感じた僕は彼女の肩に手を乗せる。

大丈夫だ！ 任せとけ！

と力強く言いたいところではあったが、額から味わったことのない量の汗が滴っていたから正直、それどころではなかった。

居間に向かう廊下が永遠だったらしいのに、と思った時には居間に足を踏み入れていて、視界が開けてソファに座るお父さんの横顔が目止まる。

僕の足は震えていた。

大きくて速い鼓動の音が、内側から鳴っている。

思わず、『ドキドキドキ』と言葉にしてしまいそうなくらいよく分からなくなっていた。

「さあさあ座って下さいな」

と彼女のお母さんが、座る位置を右手で示してくれた。

僕は、『ありがとうございます』と伝えてから、彼女のお父さんの方に視線を向けた。

ソファに座るお父さんは、僕のことを空気だと思っているみたく、テレビ画面を眺めたまま無表情を貫いていた。

床に座る僕の隣に彼女が座った。彼女のお母さんは台所でお茶を注いでいる。

何から始めて良いか分からない僕は、重たい空気にのみ込まれるように沈黙と一体化していた。

「そんなにかしこまらずにゆっくりして下さいな」

と言いながら彼女のお母さんがお茶を用意してくれた。

「ねえ、お父さん」

彼女のお父さんは、何も答えなかった。

僕は、自分が床に正座していることに気が付いた。
ちらりと横に視線を移すと、同じように正座をしている彼女の姿があった。

ソファに座るお父さんは前方に視線を向けながら、この部屋に自分以外誰も居ないような佇まいでテレビ画面を見つめていた。

しばらくして、この緊迫した空間に耐えられなくなったのか。

彼女の言葉が零れ落ちるように放たれた。

「お父さん。聞いて欲しいことがあるの」

お父さんは前を向いたまま静かに言った。

「まずは、挨拶をしてからだろう」

玄関先で撃たれた方がまだマシだった！　と思った僕は咄嗟に、「すみません！　は、初めまして！」と伝えていた。

名前を伝えようとした瞬間、ソファから立ち上がったお父さんは居間を出ていった。

「ごめんなさいね」

と彼女のお母さんが言った。

「とても不器用な人なの」

「いえ、僕が悪いです」

目の前にあるお茶を一気に飲み干した。

「そりゃあ緊張もするわよね？」

と言った彼女のお母さんの声が温かった。

「多分、お手洗いにに行っているだけだからすぐに戻ってくると思うわ」

状況を説明してくれる彼女のお母さんの有り難さに胸を打たれた僕は、彼女に視線を向けていた。

彼女は不貞腐れているような態度で、『もう少し優しくしてくれても良くない?』と嘆いていた。

「お父さんも緊張しているのよ。だから、お父さんの気持ちも分かってあげてね」

「でもさ……」

反抗しようとした彼女の言葉がそれ以上放たれることはなかった。

少し経って渋々受け入れたみたく、一息ついてから天井を見あげていた。

お母さんの言った通り、お父さんはすぐに戻ってきた。

僕はお父さんに挨拶しようと思った。けれども、今言うべきなのか、ソファに座ってか
ら言うべきなのか、ソファに座ってひと段落してから言うべきなのか……考えれば考える
程、決断することができなかった。

弱気な僕の思考回路なんて知るはずもないお父さんは、時間を掛けずにソファに座って
又、一人でテレビを見始めた。

完全に、挨拶をするタイミングを見失ってしまった。このまま黙っていると状況は悪化
する一方だろう。と思ったけれど、口にする言葉が一つも浮かんでこなかった。

いつもは、『お前は口から産まれてきたのかよ!』とからかわれるくらいお喋りな僕の
脳みそが見事にフリーズしている。

僕は、お父さんの眺めるテレビに視線を向けていた。

見かねた僕の無意識が、『テレビ画面に映る内容から会話の話題を見つけるように』と
手を差し伸べてくれているようだった。

画面に流れる『新婚さんいつてらっしゃい』を捉えた僕は、すぐさま自分の無意識を恨
んだ。この状況下で新婚さんの話をするのかよ?

『ご両親への挨拶は?』

テレビ画面の向こう側から声が聞こえた。

司会者が新婚さんに質問をしている場面が映っている。

数あるテレビ番組の中で今、どうしてこれが流れてしまうんだ？

僕は、隣に座る彼女とその隣に座る彼女のお母さんを順々に見つめた。

続けて、部屋の空間の濃度を読み取るために、ちらりとお父さんを見つめてみたけど、すぐに視線を逸らしてしまった。

テレビ画面から流れる新婚さんの声だけが、鳴り響いている。重たい空気が目に見えてしまうのではないかと思えるほど、張り詰めた空間だと思い込んでいた。

『続いての新婚さんです。どうぞ！』

と司会者の真似をしたお父さんが僕たちに声を掛けてくれたのならどれだけ気楽なことだろうか。

なんていう妄想を抱いてしまった僕は、『お願いしますお父様！』と思いながらも一度、お父さんを見つめることにした。

あ、目と目が合ってしまった。

お父さんは機会を見計らっていたかのように鋭い視線で僕を見た。
そして、口を開いた。

「言いたいことがあるなら早く言いなさい」

「す、すみません！」

咄嗟に漏らした僕の声はもう自分の声じゃないみたいだった。
後手後手に回ること展開……臆病者の僕を投影したようだった。

昨晚、何度も何度もシミュレーションしたことが、何一つ出来ていなかった。
彼女も彼女のお母さんも、僕という人間の力量を見定めるために沈黙を貫いているように感じた。

お父さんは、僕から視線を逸らすことなく僕の瞳一点だけを見続けていた。

部屋中に重たい空気が充満している。空気を払拭するには僕が行動を起こすしかないみたいだ。

ゼロをイチにする突破力が欲しい。

想いを伝える勇気が欲しい。

認めてもらえる力量が欲しい……。

直面する実力不足。そりゃあそうだ……。

今まで僕は責任を背負って生きてこなかったのだから。

他人や空間のせいにする言い訳を並べて、見つめ直す機会から逃げてきたのだから。

自分は特別だと思って、地道な努力から目を背けて生きてきたのだから……。

今までやってこなかった過去の自分を憎んだ。

小心者のくせに、偉そうな態度ばかり取っている自分を憎んだ。

記憶の底から、両親や先生、昔の恋人や、祖父母の声が聞こえてきた。

「続けることが何よりも大切」

「言い訳をせずに自分のせいにして行動すれば勝手に成長しているから」

「一か月に五千円でもいいから貯金をしておけ」

「若いうちに苦しいことと向き合っておけ。そのうち出来なくなるから」

「人の話をよく聞きなさい」

聞く耳なんて持たないことを知っていながら、それでも、大切な人たちは僕に想いを伝えてくれた。

今この瞬間、もう逃げられない状況にぶち当たった僕の脳裏には、背中を押してくれる言葉たちが浮かんでいた。

僕の大切な人間たちは、こうなることを知って、未来の僕に伝えてくれたのだろうか？

目の前に佇む大きな壁……もう、逃げ道は残されていなかった。

僕は、隣に座る彼女の横顔を見た。

そして、一息入ってから覚悟を決めた。

「おとうさん！」

目と目が合ったお父さんも、僕に覚悟が備わっていることを掴み取ってくれたみたく、瞳の奥底の優しさが灯ったように見えた。

僕はこの部屋の張り詰めた空気を一身に背負いながら、そっと、彼女のお父さんに想いを伝えた。

「娘さんを……ボブに下さい！」

想いを伝えられた時、背負っていた重荷がすうっと肉体から抜けた。

「ねえ、お父さん。私、ボブのお嫁さんになりたいの」と彼女が真剣な眼差しで言った。

「お願いします！ 彼女をボブのお嫁さんにしてあげて下さい！」
僕はもう一度、熱のこもった言葉を手渡す。

お父さんは、目を点にしながら言った。「ボブ？」

「私、ボブのお嫁さんになりたいの」

お母さんも、目を点にしながら言った。「ボブ？」

僕は勢いそのまま、頭を床に押し付けていた。

「はい！ 彼女をボブのお嫁さんにしてあげて欲しいんです！」

「僕じゃなくてボブ？」

と、お母さんが言った。

「はい。僕じゃなくてボブです」

と、僕は言った。

「君じゃなくてボブ？」

と、お父さんが言った。

「うん。この人じゃなくてボブなの」と、彼女が言った。

「じゃあ、この人は？」

「ボブの代わりに挨拶に来てくれた友人」

お父さんとお母さんは目配せをしていた。

「ボブはどこにいるの？」

と、お母さんが首を傾げながら言った。

「この世に居ないに決まっているじゃない」

「じゃあどこに居るんだ？」

と、お父さんが眉間にしわを寄せながら言った。

「彼の肉体はもう天に召されたのよ。でも、彼の魂は今も故郷のジャマイカに……。そして、世界に轟いている」

「ボブってボブマーリーのことなの？」

と、僕は彼女に訊ねていた。

「ボブと言えばマーリーに決まっているでしょ」と、彼女は言っただけだ。

「あなたも知らなかったの？」

と、お母さんが僕にお気遣いを立ててくれた。

「僕はてっきりボブディランの方だと思っていました」

自分の言葉を自分の耳で聞いた僕は、『この状況で何言ってるんだよ』と迷ってしまっただ。

「君は、面白い人間だ！」

突然、お父さんが高らかに笑った。

「この際、ボブサップでもいいんじゃないか？」

「やめてよ、お父さん。あんな野獣と一緒にしないでよ」

「三人とも、誰のことを言ってるの？」
と、お母さんが言った。

お母さんは、ボブマリーもボブデイルンもボブサップも知らないみたいだった。

あらゆるボブを知らないお母さんの髪型がボブヘアであることに僕は胸を打たれた。けれども、お母さんはユーモアを優先させるためにわざと無知を装っているのではないか、と思わされていることも知っていた。

なぜなら、『三人とも、誰のこと言ってるの?』と言い終えたお母さんが一瞬だけこちらに視線を向けて、ニヤリと口角を上げてから、ボブヘアに手を触れたからだ。

司会者の声がテレビ画面の中から聞こえてきた。

『旦那さんを選んだ理由は?』

お嫁さんの声は、彼女の声にそっくりだった。

『彼の唄声が心に響くから』

「ねえ、せっかくだからみんなでボブの曲、歌わない？」

僕とお父さんとお母さんは三人で目配せをした。

彼女の実家に足を踏み入れてから初めて一体感が生まれた気がした。

「じゃあ決まりね」

と、言った彼女は立ち上がり、玄関先へ向かって走り出す。

「何をしているの？」

と、ボブヘアのお母さんが訊ねたが、彼女の言葉が返って来ることはなく、玄関の扉を開けて、どこかへ行った。

それから、

いくら待っても彼女が戻ってくることはなかった。

娘さんをボブに下さい。

という言葉を伝えられずに悶々としていた数十分前。

あの、

背筋が凍るほど張り詰めていた空間と同じ空間に身を置いているなんて信じられなかった。

「Let's get together and feel all right」

空間は自分たちで作るものだ。とでも言わんばかりに、お父さんとお母さんと三人でボブの唄をうたっていた。

「Let's get together and feel all right」

三人で声を合わせて、ボブマーリーの唄をうたった。